

# 町民のひろは。

## 自慢あれこれ ⑱ 火繩大砲

加瀬 芳夫さん (橋本)



加瀬さんのお宅には、幕末(一、八五三)の頃外国で製造、使用されていたと思われる火繩大砲が大切に保存されている。

五年程前に親しい友人から譲り受けたものだそうで、形状(口径25mm、砲身85cm、重さ約30kg)から察すると、当時、陸上あるいは海上での遠距離戦闘用に使われていたものらしい。

古美術品には特に興味があるという加瀬さんは、数多い骨董品の中でも、この火繩大砲はとりわけ



お気に入りらしく、「近隣の愛好家から随分譲ってほしいと言われてたが断わった。日本にはない貴重なものなので、大切に保存し、後世に残したい」と語っていた。

二月二十七日(火曜日)八時三十分。雲が厚くたれこめ、今にも降り出しそうな空もよう。暖冬といわれた昨日までの気がまるまるといようなはだ寒い今朝の天候である。

八日市場市外三町の各事業所から参加した私達十五名は、訓練服に身をかため、消防署の広場に整列。

すでに消防官達は整列をしており、その、きびきびした号令や動作に、私達は、身も心も自らひきしまるような緊張感を覚えた。

### 「一日消防官」に参加して

野老 登 (横芝小教員)

通常点検終了後、消防長さんから、一人ひとりに、「一日消防官」の辞令を交付され、「今日一日、しっかりとがんばってください」という訓辞があり、その後、午後四時過ぎまでの訓練日程を体験した。

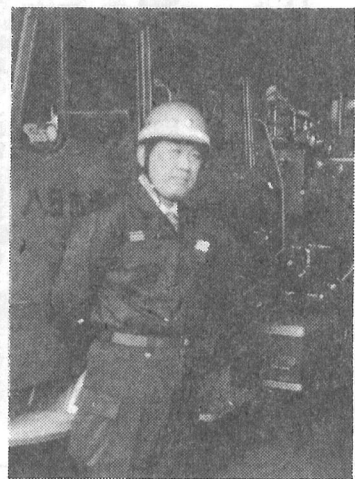
昔から「百聞は一見にしかず。」と、いうことわざがあるが、「体験は、より意義あるもの。」と、いうことを、今日一日の生活で深く感得させられたのである。

る。

それは、消防官としての毎日の訓練の中のほんの一部分に過ぎない体験ではあったが...

近代消防は、江戸時代にみられるような、単なる「火消し」ではなく、

予防活動・警防活動(消防、救急、救助)等を私達の生活に密着させ、その活動は、強固な組織力と、機動力、更に洗練された隊員の力によって、維持発展されているもの



であることを、消防官のみならずに接して体験的にわかった。

中でも感銘を受けたのは、レスキュー(人命救助)部隊の訓練を見学した時。隊長さんは、「一つのことを身につけさせるには、百のくり返しが必要である。」と言われたが、このことは学校教育についてもいえると思う。つまり、「反復練習の大切さ」とか、「量が質を呼ぶ」と、いう考え方は、今の学校教育の中でも重要な要素であると私は信じている。

丹念に「覚える」というより、身につくまで繰り返す指導者の気迫と隊員のねばりが、かけがえない人命を救助するための、高度な技術と至難のわざを生み出させる原動力となっているであろうことを知り、熱い感動を受けたのは、たんに私一人であつたらうか。おわりに、一日の生活を通して厳しい規律と訓練の中にも、ほのぼのとした明るさ、温かさを感じ、独得の民主的ふん囲気を醸(かも)し出している消防署と、消防官のみならず、私達は全幅の信頼を寄せざるものである。今後、私たちは、この貴重な体験を、それぞれの職場や家庭で十分活かし、生命の尊重と市民生活の改善に努力していく覚悟である。閉会式における消防長さんの言われた「国民、皆消防」と、いう言葉を反芻しながら...